

## 特集 文学教材で何を教えるか

お気に入りの一首を見つけ、それについて熱く語る授業を

千葉聡

一 一首をめぐって議論する喜びを

多くの生徒が国語の教科書を通して、初めて短歌に触れる。それは教員も同じだ。歌集は少数の自費出版が主流であり、なかなか書店に流通しない。与謝野晶子の何首かを知っている人はいるだろうが、『みだれ髪』を読みとおしたという人は、一体どれくらいいるだろうか。

「千葉さん、短歌って、どうやって教えたらいいの？」

よく質問を向けられる。私は二十代の頃から短歌誌「かばん」に所属しており、歌集を何冊か上梓している。それを同僚にも寄贈しているので、勤務校の国語科準備室内には「短歌のことは千葉に訊け」という雰囲気があるのだ。

「いやあ、私にもよく分かりません。授業では作品の意味内容を詳しく解説したりしますが、短歌も俳句も、『ここが面白いよ』と解説すると、逆に味気なくなってしまうことが多いですからねえ」

「そうだなあ。それでも授業では、何かそれらしいことを解説しないといけないんだよなあ」

われわれ国語教師たちはうなずき合う。「それにしても、千葉さんはなぜ短歌を詠もうと思ったの？」

放課後、多少余裕があるときには、こんなことを訊かれる。お茶の香りの向こうの同僚に、私は答える。

「もちろん、短歌を好きになったからですよ」

「どんな短歌が気に入ったの？」

「たとえば、穂村弘の『校庭の地ならし用のローラーに座れば世界中が夕焼け』とか。いい歌でしょう？」

すると同僚たちは「いいね。情景が目浮かぶなあ」とか、「これだけだと、だれがやっている行為なのかが分からないよ」とか、さまざま意見を言ってくる。

「地ならし用のローラーなんて、今の生徒たちは知りませんよ」

「いや、分かるでしょ！ 歌の主人公の小ささと、世界の大きさを表現している、なかなか面白い」

「そうですか？ 『世界中が』なんて、大げさすぎてついていけません」

「確かにそこは大げさ、というより大雑把だけれど、そのあとに『夕焼け』が出てくるのが、意外で面白いんじゃないかなあ」

そこへ生徒たちが、何かの用事でやってくる。

「なんだか盛り上がりすぎてますね。何を話してるんですか？」

「千葉先生、さっきの一首を書いてみてくださいよ」

連絡用のホワイトボードに、私がさつ

きの一首を書くこと、今度は生徒の一人が「いかにも青春って感じですね」と意見を述べたりして、さらに議論は盛り上がる。

これこそ、文学の喜びだ。国語教師も生徒も、一人の人間として、自らの感性を信じて、議論を繰り広げるのだ。意見を口にするだけで、本来の自分に立ち返る。ときに誰かと思いを共有できる。こういう心楽しいひとときを、授業中に持てないだろうか。

## 二 言葉にこだわりを持つこと

短歌をめぐる楽しい話し合いを生み出すには、まず意見を言いやすい雰囲気をつくるのが大切だ。教員が教科書掲載歌の解説をし、そのあとで「どう思いますか?」と言ったところで、生徒たちは、教師の気に入る無難な答えを返さないといけない、と思うだけだろう。そこで私は、作品そのものの力を信じて、授業で私が解説することなく、生徒たちに、自由に短歌を味わうようにさせてみた。『明解国語総合』所載の「遠い片手 短歌九首」には、ひとつのテーマのもとに三首が並べられている。

ふたり

対岸をつまずきながらゆく君の遠い片

手に触りたかった

永田紅

終バスにふたりは眠る紫の〈降りますランプ〉に取り囲まれて

穂村弘

夜が明けてやはり淋しい春の野をふたり歩いてゆくはずでした

東直子

ここに並んだ三首は、どれも歌の奥に、何か深い人間ドラマを隠し持っている。

だが、字面を追うと、どれも分かりやすい言葉ばかりだ。

そこで、生徒たちに訊いてみる。

「どの歌が気に入りましたか?」

作品の世界に深く入り込んでいなくても、三首のうちのどれか一つを挙げれば

いい。生徒にとっては楽な質問だ。「では、その歌のどんなところがいいと思ったのですか?」

これはやや難易度が上がる。だから、そつと助け舟を出しておきたい。

「その歌の中の、どの言葉をいいと思うのか、教えてくれればいいですよ」

短歌は磨き上げられた言葉の一連だ。だから、一首の中のどの言葉を取り上げても、格好がつく。生徒は、「永田紅の歌の『つまずきながら』という言葉にハッとしました」とか、「穂村作品の〈降りますランプ〉が印象に残りました」とか答えればいい。だが、こうして、形

式的でも「この歌の、この言葉がいい」と発言したとたん、人は魔法にかかる。「自分はこれが好きだ」と認識すること

で、人はその歌に、歌の中の言葉に、こだわりや思い入れを持つようになるのだ。

また、言葉にこだわりを持つことで、人はその一首を深く読み解きたいという意欲をかきたてられる。生徒の口から、ここまで引き出すことができれば、授業は面白い議論に向けて動き出すだろう。

## 三 謎の含まれた一首を

前掲の「ふたり」三首のように、優れた一首は、ときに物語の一部のように見える。生徒たちは、歌の背景となる物語の全体像を掴むために、想像力を用いるしかない。

教室では、そんなふうには、想像力を用いたく刺激させられるタイプの、謎の含まれた一首を取り上げたい。その謎に向かつて、さまざまな意見が出されれば、議論は大成功であろう。

『明解国語総合』には、謎の含まれた短歌が多く掲載されている。どれも清新な現代短歌である。ぜひ、ご覧いただきたい。

(ちばさとし・横浜市立桜丘高等学校)